



TITLE:

京大広報 No. 162

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 162. 京大広報 1978, 162: 797-804

ISSUE DATE:

1978-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209526>

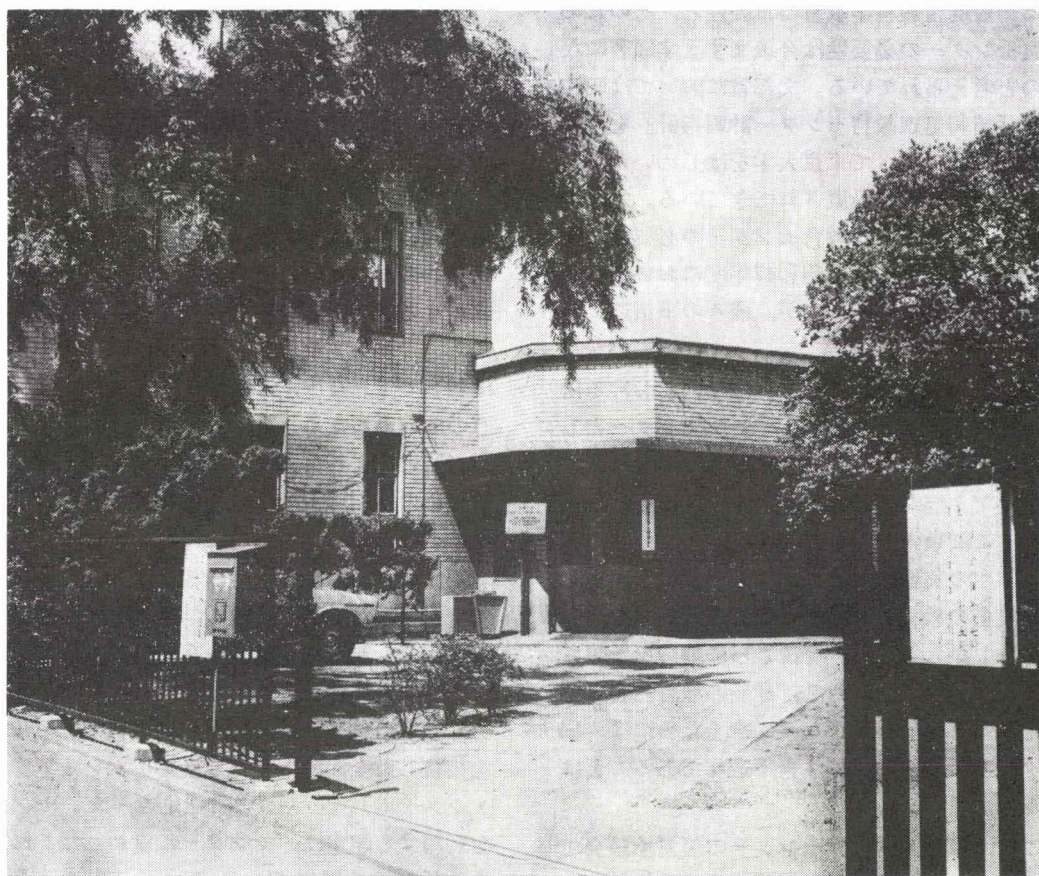
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 162

京都大学広報委員会



東南アジア研究センター（所在地：左京区吉田下阿達町46）—関連記事本文7ページ〈紹介〉—

## 目 次

情報処理教育センターの設置.....	2	〈随想〉 京大原爆災害総合研究調査班の遭難	
6月17日の捜査と6月25日の現場検証.....	3	名誉教授 木村 毅一.....	6
創立記念式典の挙行.....	3	〈紹介〉 東南アジア研究センター.....	7
昭和53年度定期健康診断の結果		数学入門公開講座.....	8
および死因調査成績.....	3	白馬山の家夏季開設.....	8
		体育館附属プールの夏季利用.....	8

## ＜大学の動き＞

## 情報処理教育センターの設置

京都大学情報処理教育センターは本学の一般的情報処理教育を行なうことを主目的とする学内共同教育研究施設として、昭和53年4月1日付けで設置された。

最近、情報科学の応用はきわめて広範囲にわたり、学術の諸分野においては情報科学との関わりがますます深くなっている。したがって、大学における一般的情報科学教育の重要性と、そのための教育センターの必要性は今後ますます顕著になるものと考えられている。文部省においては昭和47年に「情報処理教育センター計画指針」を示しており、これに従って東京大学をはじめいくつかの大学でセンターが設置されてきている。本学においても、このような教育センターの必要性は十分認識されており、既に昭和47年度において計画が進められたこともあったが、種々の事情により実現に至らなかった。

一方、京都大学計算センターは学内における研究のための計算サービスを行なうセンターとして、長年その使命を果たしてきたが、京都大学大型計算機センターが設置されて以来、ほぼその使命を終り、ここ数年来、各学部学科からの要請に答えて、学生の実習のための計算サービスを実施して、事実上の教育センターとしての役割りを果たしてきた。しかしながら、今後さらに増加を予想される多数の利用学生に対し、最新の教育内容と方法を取り入れた教育を行なってゆくためには、同センターの設備は旧式にすぎ不適切であることは明らかであった。

そこで、京都大学計算センターの運営協議会では、昭和49年に「情報科学に関する一般的教育方法樹立のための懇談会」を設け、この問題について全学的な検討を行なうこととなった。その結果、全学のほぼ一致した意見として、情報科学教育センターを早急に設ける必要があること、およびこのセンターの内容についての見解がまとめられ、昭和50年に報告がなされた。運営協議会ではこの報告にもとづき検討を行ない、工学部を世話部局として教育センターの提案を行なうことをきめ、全学の同意を得た上で昭和51年より概算要求

を提出してきたわけである。

概算要求では「教育用計算機センター」としていたが、本年度文部省より認められるに当り、「情報処理教育センター」という名称に変更が求められ、この名称の下に設置されることとなった。新センターは前記京都大学計算センターを母体とし、その建物を改装し、そこに新しい教育用計算機（借入れ）を導入することになった。また定員は振替を含めて教授（兼任）1、助教授1、助手2、技官1、事務官2である。

センターの主要業務は、(1)教育用計算機システムを管理運営し、教育のための学内共同利用に供すること、(2)情報処理教育に関する研究開発を推進すること、(3)情報処理に関する共通的基础教育を行なうこと、(4)学部・研究科における専門教育に係る情報処理教育に協力すること、(5)その他情報処理教育に関し必要と認めること、となっている。このセンターで実習を行なうなどセンターを利用する学生数は年間3,000名程度が見込まれるので、これら主要業務およびそれに付随する業務は相当の量となり、センターの定員だけでまかなうのは容易でなく、全学の関係教官の参加・協力が必要と考えられる。このような参加・協力を得るための体制については、昭和54年度の新学期に間に合わせるべく検討を進めることとしている。

センターにおける学生の教育は、計算機を使う実習が主となるが、多数の学生の実習を効率よく行ない、しかも教育効果を高めるには、教育用計算機もそれに応じた機能と構成が必要であり、十分な検討の結果、多数の端末装置（学生用60台）を接続した全面的なTSS（タイムシェアリング・システム）を採用することとなった。センターを利用する学生は、センターに置かれたこれら端末装置を各自随時自由に扱って、計算機と“会話”を行ないながら問題を解くというような、計算機をより身近なものにする実習を行なうことができる。また、指導の教官も端末装置を使って、対象学生の学習状況を随時容易に把握できる。さらに、可能な限り自動運転化されており、計算機操作も少数の要員ですむようにしてある。

センター発足と共に組織された機種選定専門委員会では、上記のような諸機能を効率よく遂行する計算機システムの選定を慎重な審議の下に進



め、HITAC M-180（株式会社日立製作所製）の採用を答申し、センターの協議委員会で承認された。現在これをもとに計画を進めており、昭和54

年1月からサービスの開始を予定している。

（情報処理教育センター）

## 6月17日の捜査と6月25日の

### 現場検証

6月17日（土）、警察による学内および熊野寮の捜索が行なわれ、学生2名が逮捕された。

この日の捜索は、さる5月16日午後5時すぎ、農学部構内で起った傷害被疑事件について、突然行なわれたもので、関係の各部局長等が立会人となり、午前7時頃から始まり同8時30分頃までに終了したが、捜索終了直後、学生2名が令状により逮捕（うち1名は緊急執行）された。

捜索は、文学部学友会ボックス・工作室、教育学部自治会ボックス・学生控室、理学部学生控室（無所属）、農学部自治会ボックスおよび熊野寮C棟4階の一室について行なわれ、白衣、ビラその他の押収等が行なわれた。

なお、この日の捜索に関して、事前連絡の時間等について一部問題があったので、学生部長は、これらの点について、警察に対し強く申し入れた。

さらに、6月25日（日）、上記被疑事件に関する警察の現場検証が農学部101教室について行なわれた。検証は、農学部長ほか関係者が立会人とな

り、午前8時頃から始まり同9時すぎ終了した。

### 創立記念式典の挙行

6月17日（土）、本学創立81周年記念式典が、名誉教授、部局長ら関係者多数の出席を得て、本部大ホールで挙行された。

この日の式典は、午前10時に始まり、総長式辞、永年勤続者の表彰、永年勤続者代表成岡次一事務官（医学部 附属病院 総務課）の答辞に続いて、木村 廉名誉教授の発声により京都大学の発展を願って万歳三唱が行なわれ、10時40分終了した。

本年度の被表彰者は、勤続30年の者が53名、勤続20年の者が69名、計122名である。

総長は、この日の式辞の中で、これら永年勤続者の労をねぎらうと共に、この一年間における本学の動向、総長の中国訪問に際しての所感、キャンパス・大学院問題等当面する本学の問題点とその現状を報告した。

なお、同日11時30分から、同ホールで永年勤続者を囲む記念パーティが、また御車会館では名誉教授懇談会が、それぞれ行なわれた。

## 昭和53年度定期健康診断の結果

### および死因調査成績

保健管理センターが行なう主要な業務の一つに、学生および職員の定期健康診断がある。3月末の2日間に行なわれる合格者健診（約2,500人）を皮切りに、4月中旬から10日間にわたり行なわれる在学生の健診（約12,000人）、それが終わると職員の健診（約6,000人）が本部地区3日間、病院地区3日間に分けて行なわれる。このようにして京都地区の健診が一通り終わると、センターでは健診チームを組んで宇治地区、高槻地区、犬山の霊長類研究所、芦生演習林へと出張健診に出かけていく。その他の遠隔地にある諸施設については、近傍の医療機関に健診を依託し、その結果

報告を受けている。

このように、3月末からおよそ3か月間は健診業務に忙殺されるのが通例である。ことしも漸く学生・職員の定期健診業務を終えることができたので、その結果の概要を報告するとともに、在学中あるいは在職中の死亡に関する調査資料も加えて、保健管理上の問題点に言及したい。

#### 定期健康診断の結果

##### 1 受検率および要注意者の率

期間内における受検率、要注意者（人事院規則に基づく病者指導区分C<sub>2</sub>以上注の者）の率を表1に示した。結果は6月10日現在でまとめたもの

注）C<sub>2</sub>以上とは、医師による直接の医療行為あるいは定期的な観察指導の下で、何らかの生活規制を必要とする者。

表1 定期健康診断の受検率および要注意者の率  
(昭53.6.10現在)

	該当者 (人)	受検者 (人)	受検率 (%)	要注意者 (人)	要注意 者の率 (%)
学 生	15,068	12,724	84.4	125	0.98
職 員	6,103*	4,703	77.1	285	6.1

\* は一部の遠隔地を除く

で、受検率は学生84.4%、職員77.1%であるが、年度末にはいずれも90%を越えるものと期待している。所定の期間内に受検できなかった者は、月、水、金の午前中に追加健診を受け付けているので、都合が付き次第に受けて頂きたい。学生の場合には、「健康診断を受けないと当該年度の試験を受けることができない」と定められているので、注意が必要である。

要注意者の率は学生0.98%、職員6.1%であり、職員の方が約6倍の高率である。

## 2 要注意者の疾患別内訳

表2に要注意者の疾患別内訳を示した。要注意となった原因疾患について、学生と職員の場合を比較してみると、疾患の分布に著しい差異のあることが明らかである。

表2 要注意者の疾患別内訳

	学 生		職 員	
	(人)	(%)	(人)	(%)
泌尿器系疾患	81	64.8	13	4.5
呼吸器系疾患	18	14.4	7	2.5
循環器系疾患	17	13.6	234	82.1
糖 尿 病	—	—	26	9.1
関 節 疾 患	—	—	4	1.4
肢 体 不 自 由	6	4.8	—	—
そ の 他	3	2.4	1	0.4
計	125	100.0	285	100.0

学生では泌尿器疾患が64.8%を占め、その大部分が腎炎またはその疑いのものである。しかし、腎機能障害を伴うものは幸いにして少ない。呼吸器疾患は14.4%を占め、その過半数が肺結核である。しかし、開放性結核は一人もない。要療養学生の大多数が結核であった往時を考えると、結核の減少には隔世の感が深い。循環器疾患は13.6%を占め、この中には心房あるいは心室中隔欠損、弁膜症、ファロー四徴症などがあるが、既に手術を受けた者もかなり含まれている。心疾患のため

手術の適応があると判断される学生は一人もないことは喜ばしいことである。手術を受けなければ、おそらく大学まで進学できなかったであろう重度の心疾患が、適切な年令で手術を受け、何の制限もなく学問できることを思うと、心臓外科の発達、普及に感謝するばかりである。

学生では糖尿病が指摘されていないが、これは尿糖検査を行っていないためである。センターにおけるかつての調査資料からみて、0.1~0.2%程度の糖尿病があるものと推測している。

職員の場合をみると、要注意者の実に8割強が循環器疾患によるものである。この中の多くは、体内臓器に合併症のない本態性高血圧症であるが、糖尿病を随伴するもの、狭心痛発作のあるもの、冠状動脈不全を合併するものもかなり見られる。また、既に心筋硬塞や脳神経障害を起こしたが、日常勤務に復帰できた幸運な方々もある。

高血圧が成人病対策の一つとして重視されるのは、放置すると早晚、心臓、腎臓、中枢神経系などに致命的な合併症を起こす確率がきわめて高いためである。早期に、しかも上手に血圧をコントロールすることが重篤な合併症を予防する要点である。

糖尿病は要注意者の9.1%を占めているが、比較的軽症ないし中等症の者が多い。尿の検査は35才以上の者にのみ行なっている。尿糖陽性率は男子7.4%、女子2.5%もあるので、この全例について精密検査（ブドウ糖負荷試験）を行なうことができれば、無自覚性の糖尿病はこの数値をかなり上回るものと考えている。

泌尿器系疾患は学生の場合に比べて被患率は少ないが、職員の場合には高血圧ないし動脈硬化による二次性の腎障害が多いので、嚴重な管理を要する者が多い。

呼吸器疾患による要注意者数は比較的少ないが、医師の経過観察または医療を要する者のみに限ったためであり、胸部X線上、広範な古い病巣を残している者の率は、学生に比べて甚しく多い。

なお、人事院規則の一部改正によって、本年度から検査項目の一つとして肝臓機能が加えられた。本学では一般の健診とは時期を別に行なう予定をしているので、これを行なえば各種の肝臓障害がこの表に加わる筈である。



## 死因調査成績

いつも健康で勉学し、研究し、勤務できることが理想であるが、現実には傷病による欠席や欠勤、更に休学や休職、時には死亡事故さえ阻止することはできていない。これらの実態をよく把握したうえで、保健計画がなされるべきであることは申すまでもない。ここには学生および職員の死因となる傷病について言及したい。

## 1 学生の死因

かなり以前の調査成績で恐縮であるが、表3は13年間の学生死亡148名についての死因調査成績である。表の左側の欄は提出された死亡診断書の病名に従って分類したもので、その構成比は全国の学生平均と比べて多少の差異はあっても、第1位事故(33.1%)、第2位自殺(29.7%)、第3位循環器疾患(15.5%)であり、死因順位は全国平均と全く同様である。

表3 傷病別の学生死亡数とその構成比(昭36~昭48)

死 因	診断書による (人) (%)	調査後の訂正 (人) (%)	全国大学 (昭44) (%)
自 殺	44 29.7	67 45.3	15.3
循環器疾患	23 15.5	6 4.0	10.2
悪性新生物	10 6.8	10 6.8	6.0
泌尿器疾患	4 2.7	4 2.7	4.5
消化器疾患	4 2.7	4 2.7	5.4
神経系疾患	2 1.4	2 1.4	2.1
呼吸器疾患	3 2.0	3 2.0	1.9
結 核	— —	— —	1.1
事 故	49 33.1	43 29.0	42.3
その他・不明	9 6.1	9 6.1	11.2
計	148 100.0	148 100.0	100.0

(保健管理センター調べ)

ところが、循環器疾患(診断書記載の病名では心不全、循環不全、心臓麻痺、心筋硬塞、心筋障害など)をはじめ、他の死因疾患についても、生前の健診や診察の記録、新聞報道、主治医との連絡、遺族との面談または交信などの情報によって、可能な範囲で真の死因について調査を行なった。その結果、死因傷病別構成比を修正したものが中央の欄である。

これを見ると、学生の死因の中で自殺が実に45.3%を占め、他の死因に比べ極めて高率になることは重大である。事故死、悪性新生物がこれに次いでいる。

センターが行なっている健康診断は、これらの主要死因に関しては、残念ながら十分な阻止戦力になっているとは言いがたい。センターではせめて心理相談のきっかけになることを期待して、新入学生に対してUPIやバウムテストを行なっている。センターや学生懇話室には専門のカウンセラーが真剣に心理相談に応じておられるので、悩める人は気軽に利用されることを望んでいる。

## 2 職員の死因

表4に、昭和50年以降の職員死亡21名について、死亡時の年令と死因傷病を示した。

表4 職員の死亡(昭50年4月~昭53年5月)

死亡時 年 令	(人)	死 因	(人)
20才~	2	悪性新生物	9
30才~	2	心 疾 患	4
40才~	4	脳 卒 中	3
50才~	9	消化器疾患	2
60才~	4	腎 疾 患	1
計	21	交 通 事 故	1
		そ の 他	1
		計	21

(保健管理センター調べ)

死亡時の年令は25才から69才の全年令層にわたり、青壮年期にも死亡事故が少なくないことは注目すべきである。

死因はがんなどの悪性新生物が最も多く、心疾患、脳卒中がこれに次いでいる。

職員の健康診断として、一般計測、問診のほか胸部X線検査を全員に行ない、35才以上の者には尿と血圧の検査を加え、40才以上の者には更に胃のX線検査と肝臓機能検査を行なっている。

これらの検査項目は、それぞれの主要死因に対応しているものである。ただ、心疾患の早期発見と予防のためには、血圧や胸部X線の検査だけでは不十分であって、少なくとも心電図の検査を加えることが望まれる。

センターでは、数年前より文部省共済組合から多額の補助金を受けて、希望者には人間ドック的な諸検査を行なっているため、定期健康診断の不備を補う意味で進んで受検されるよう願っている。

(保健管理センター)







## 数 学 入 門 公 開 講 座

数理解析研究所では、夏季休暇中に、下記の要領で公開講座を開催します。

記

- 趣 旨 社会人、中・高校教師、学生等ある程度数学的素養のある一般人（大学教養程度の数学の素養のあることが望ましい）を対象に、専門的題材をわかりやすく解説しようとするもの
- 期間、時間割および講師

時間 \ 日	8月 1日 (火)	2日 (水)	3日 (木)	4日 (金)	5日 (土)	6日 (日)	7日 (月)	8日 (火)	9日 (水)	10日 (木)
13:15~14:45	情報処理の数理 高 須 達 (数理解析研究所教授)						特異点とカタストロフィー 廣 中 平 祐 (数理解析研究所教授)			
15:00~16:30	偶然現象の微積分 伊 藤 清 (数理解析研究所教授)						生物モデルの数学 山 口 昌 哉 (理学部教授)			

- 場 所 数理解析研究所 4 階大講演室
- 定 員 120 名（定員を超過した場合は、2 階層抽せんにより決定する）
- 受 講 料 1,000 円（開催の初日に受付へ納付のこと）
- 申込方法
  - 期限 昭和53年 7 月 7 日（金）午後 5 時
  - 手続 官製往復ハガキに①氏名 ②住所（電話番号も記入のこと）③年令 ④職業（○大学 1 回生，○○高校数学担当教員，主婦など）⑤申し込みの動機を明記のうえ下記あてに申し込んで下さい。

なお返信ハガキは採否の通知に用いますから、必ず住所・氏名を記入して下さい。

〒606 京都市左京区北白川追分町

京都大学数理解析研究所「数学入門公開講座」係  
(電話(075)751-2111内線7202, 7203)

## 白馬山の家の夏季開設

本学の学生および教職員の厚生施設として、例年夏季および冬季に開設されている白馬山の家を、今夏も下記により開設しますので、利用を希望される方は、直接体育会事務室まで申し込んでください。

この山の家は、中部山岳国立公園白馬山麓の梅池高原にあり、雄大な北アルプスの峰々に囲まれ、登山および避暑などに最適です。

なお、建物は、山小屋風の木造地上 2 階地下 1 階建て、間取りは 1 階が食堂兼談話室、2 階が寝室（ベッドで42名収容）、地階が浴室、乾燥室等からなっています。

記

- 名 称 京都大学<sup>はくば</sup>白馬山の家
- 所在地 長野県<sup>きたあづみ</sup>北安曇郡小谷村大字千国字<sup>ちくに</sup>  
柳久保乙869の2  
電話 026183-2405  
(交通機関)  
国鉄大糸線「白馬大池駅」下車、松本電鉄バス「親<sup>おや</sup>の原<sup>はら</sup>」下車、徒歩約20分
- 開設期間 7月20日(木)から8月20日(日)まで

- 所要経費 1人1泊 使用料80円、ほかに食費等実費程度
- 申 込 み 利用に関する詳細は、体育会事務室（西部構内総合体育館内・電話学内2574）に照会してください。

## 体育館附属プールの夏季利用

本学教職員および学生は体育館附属プールを下記により利用できますのでお知らせします。

なお、詳細については、学生部厚生課厚生掛（西部構内体育館内・電話学内2590）に照会してください。

記

- 使用できる期間 7月17日(月)から  
8月31日(木)まで  
ただし、土曜日および日曜日は使用できません。
- 使用できる時間 正午から午後2時まで  
(備考)
- 都合により使用を休止する日もあります。
  - 利用に際しては、必ず職員証または学生証を携行してください。(学生部)